

移住就農

新規参入

研修制度

にしだ かずひろ

ゆきこ

西田 和寛さん・由起子さん(倉敷市)



就農：2018年4月（就農当時37歳）

新規就農研修：2015年4月～2018年3月

就農パターン：移住就農（大阪府出身）

耕地面積：50a（うち借地50a）

経営面積：ぶどう30a（3品種）

経営参画者：本人、妻

夢だった農家となり、地域との『つながり』の中、仲間たちと支え合いながら奮闘中。妻と一緒に、全国に誇れるぶどうを作りたい。

——就農のきっかけは？

子供のころから漠然とではあるものの「海外に住む」「農業をする」という大きな2つの夢（憧れ）をもっていた。この夢の実現のため、まず、前職の小学校教諭時代に海外日本人学校の教員に応募し、一つ目の夢をかなえた（アルゼンチンで3年間）。海外での生活は挑戦することへの自信につながり、もう一つの夢の実現に向けての原動力となった。和寛さんの夢は結婚前から妻の由起子さんも知っており、「本気で調べてみて、できそうだったらやればいいんじゃない？」の言葉が背中を押してくれた。上のお子さんが小学校に上がる前のタイミングだったことも転職・移住を考える大きなきっかけとなった。

——前職の経験は活かしている？

ぶどうを栽培することについては直接的な経験の活用はないものの、小学校の地域学習（3年生を対象に船穂地域の誇れるものについての学習）などの講師活動では役立っている。

——岡山（倉敷市）を選んだ理由は？

前職同僚からの「夏休みに訪れただもの王国おかやま、ええわー」と聞いたことが検討のきっかけとなった。岡山県は兵庫県を挟んで遠いイメージがあったが、新幹線もあり、そんなに時間がかからないことから移住検討対象となった。大阪府でのオリエンテーションに参加した時、「船穂」がメニューに入っているツアーが紹介されており、参加してみたら「イオンが見えるし商業地域が近い」、「圃場がある山腹から水島コンビナートが展望できて工業地帯の雰囲気は地元高石市（大阪府）に似ている」との印象を受けた。子供が育つための適度な自然、利便性、住環境がよいと感じられた。

その後、再度見学を訪れてみて、船穂地区の農家は後継ぎや県外からの移住者など20～40代の人も多く、就農後にお子さんを授かった方もいることが分かった。さらに農業（ぶどう）で生活していけるという実績を持っており、先輩移住者の方も気軽に受け答えしてくれる雰囲気だったので、この地への移住を決意した。

——「ぶどう」を選んだ理由は？

就農を検討していた時、船穂ではぶどうとスイートピーでの就農者を募集していたが、当時、自分が実家に送りたいものを考えて「ぶどう」を選択した。

就農してみると「くだもの王国おかやま」の中でもこの地域は『極高品質』ぶどうで有名であり、栽培が大変難しい果物の女王といわれる「マスカット・オブ・アレキサンドリア」は全国でも岡山県にしかないことを知り、身が引き締まった。

——就農で苦労した点と解決方法は？

【農地】

農業公社が間に入ってくれて、3年後の就農時に自分が借りる園地を20a確保してもらっていたが、樹の育成期間は収入がないため、他の借りられる成園を探していた。運よく師匠のお父さんから加温施設を持つ園地情報を教えてもらい、まず瀬戸ジャイアンツ園、翌年にシャインマスカット園を借りることができた。

【資金（経営・生活）】

貯金はできるだけしておいたほうがよい。お金が無くなってくると心がとげとげしくなると思うので、万が一収入がなかったとしても3年間は家族が何とか生活できる蓄えが必要だと思う。

【栽培技術】

農業経験は全くなかったが、師匠をはじめ先輩・若手関係なく生産者間での技術指導、また普及指導センターなど指導機関による講習会で技術習得させてもらった。就農2～3年目までは周囲にいろいろな意見、技術を聞いて回っていた。

【住宅】

アパートの仮予約を済ませていたが、公社経由で作業小屋つきの農家の一軒家

を格安で紹介してもらえたので、そちらに決めた。今年、新築にこぎつけたが、すべては運と、運をつないでくれる人との「つながり」だと思う。感謝している。

【機械・施設の準備】

軽トラや防除機は自己資金で揃えたが、ハウス設備については加温施設込みで借りることができている。その他、リースなどJAに仲介してもらって、市や県の補助事業を活用して揃えてきた。借入金がないようにできるだけ自己資金で調達したいと考えていた。

【家族の理解】

妻は賛成してくれていたものの、当初、両親が就農に反対だった。就農してからぶどうを送っていくうちに応援してくれるようになった。

——計画と現実のギャップはあった？

農業を志向しているとき、農業に対しては漠然と「晴耕雨読」ののんびりしたイメージをもっていたが、現実的には待てられない作業を体力・気力をもってこなさなければならず、晴耕雨読の生活では農家はできないことを実感した（そのかわり単価がよい地域なのでしっかり収入をあげることが可能だけど）。ただ、オフシーズンがあるので、ありがたい。

消防団やPTAなど地域の中でのつながりがある。大阪時代と比較するとギャップはあるが、そこで生まれた「つながり」が私を支えてくれている。

——地域への適応、順応に苦労した点、気を付けた点は？

あいさつは、なるべく自分から率先してしたほうがよい。地域行事や消防団、PTAなどの活動にもできるだけ参加してきている。

——経営目標は？

今のところ、面積拡大は考えていない。今後は品質をあげていく。船穂地区は高品質ぶどうで全国的な知名度をもっており、船穂の名に恥じないぶどうを一房でも多く作り、全国に誇れるぶどうでずっと食べていけるようにしたい。

——農業のやりがいとは？

定期的な休みはないけれど日が暮れたら帰るので、家族と一緒に時間をとれるようになった。お日様のリズムを感じながら過ごせるのも心地よく、充実した日々を過ごしている。

「おいしい」という直接の声を頂けることがうれしい。最近では、前述の小学校の地域学習でお手紙をもらって「船穂の中に日本が誇れるトップブランドがあることを知らなかった」「農家ってすごいなと思った」などの、ちょっとした言葉が励みになっている。

——産地に入るメリットは？

個人では一年で一回しか栽培を経験できないが、産地で情報共有すれば他の生産者の経験も得ることができるので、技術向上にとっても有利。加温産地特有の「未来が見える」対応も可能になる（加温したブドウの生育を見てその年の傾向を把握し、ほかの作型での対応を事前に検討できる）。

また、産地でまとまった量を出荷できるので、市場に認識してもらえる。エンドユーザーとの調整、クレーム対応なども処理してもらえるので、栽培に専念できる。

——今の産地の魅力は？

日本でトップクラスの技術を持つ農家が多く存在し、果物専門店等でも広く認知さ

れており、東京の超有名高級果物専門店も年2回当産地を訪れている、という誇りある産地であること。

——地域との関わりは？

仲間たちと日々支えあっている。私が事故で2か月入院した時、農家の仲間たちがハウスの世話をしてくれたり、つわりが激しく運転ができなかった妻を病院へ送ってくれたりした。おかげで治療に専念することができた。近所や行政もとてもよくしてくれた。地域の農業後継者クラブや消防団にも所属している。地区の草刈やそうじなども家族で参加している。

——後進へのアドバイスは？

農家というと畑で植物相手に仕事しているイメージだが、船穂町は施設栽培なのでオフシーズンは施設のメンテナンスをする必要がある。就農を目指して作目を選択するときには、作物の栽培面にだけ目を向けるのではなく、オフシーズンの仕事など周辺要素についても意識したほうがよいだろう（今では、ホームセンターに行くと工具売り場を覗いてはワクワクしている）。

——就農前の自分へのアドバイスは？

なるべく若いうちに動いたほうがよい。私は35歳前だったが、ギリギリだと思う。

——私の一文字

「続」。

これまでも、これからも。

